

令和7年度 地域循環共生圏づくり支援体制構築事業 中間共有会 発表資料

活動団体の本事業での活動テーマ

『陸の孤島の歴史が育むエネルギー自給を
中心とした地域循環共生圏づくり』

活動地域 : 北海道石狩市浜益区
活動団体 : 浜益地域循環共生圏推進協議会
「続ふかんば」
中間支援主体 : NPO法人ezorock

1

活動・支援スケジュール

■スケジュール

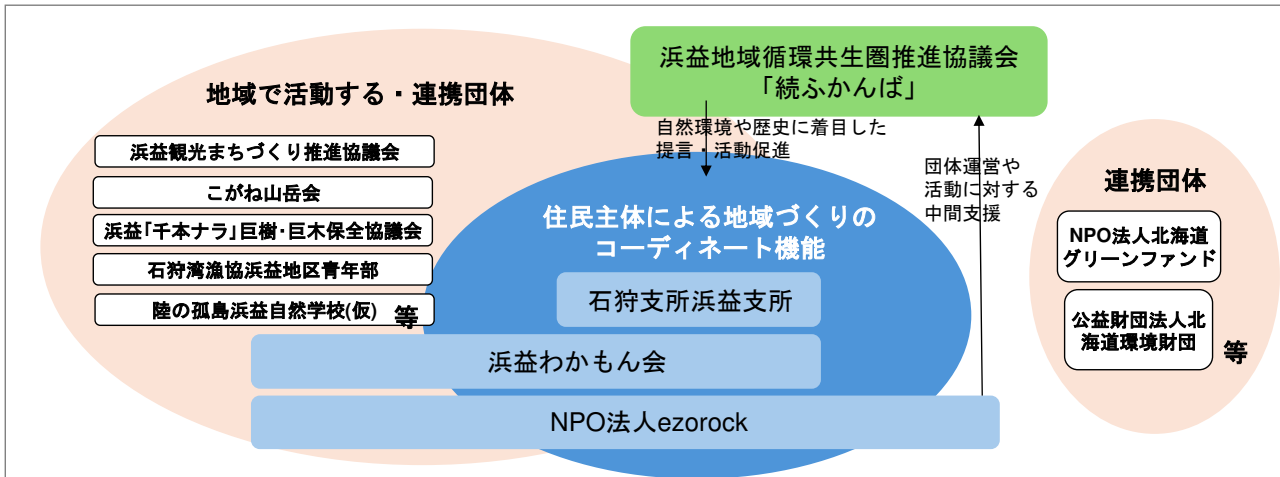
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域プラットフォーム構築のための取組【活動団体】		◆いっぺかだれや	◆勉強会	◆いっぺかだれや			◆いっぺかだれや	◆勉強会		◆いっぺかだれや	◆勉強会	
		noteでの情報発信										
		関係人口の受け入れ・大学等教育機関との連携、受け入れ										
ローカルSDGS事業創出に向けた取組【活動団体】		再生可能エネルギー推進（小水力発電・木質バイオマスの活用）										
		◆写真WS	サマースクール実施					◆写真WS				
		レザー釣り具に関する調査										
		地域資源調査										
中間支援主体の支援・取組計画		地域情報の拡散										
		関係人口のマッチング・コーディネート										
		活動実施に向けた協議・サポート										

備考（補足説明など必要な場合は記載）

2

“地域プラットフォーム”のイメージ

”地域プラットフォーム”のイメージ



地域プラットフォームの特徴

- ・ 自然資源、歴史、持続可能性の視点を持つ「続ふかんば」の存在により、世代を超えた関係性が地域づくりに入っている。
- ・ 地域循環共生圏に関わる取り組みもあり、行政、住民による地域団体、中間支援機能を持つ団体の三者協働によるコーディネート機能が生まれつつある。
- ・ 中間支援を担う組織が地域の中で役割を持っている。それにより、地域との深い信頼関係が生まれている。

3

地域プラットフォーム構築のために取り組んだこと

取組①『大学等教育機関との連携、受け入れ』／取り組み②『ヒグマフォーラムin浜益』

【活動内容】

- ①北海道大学、酪農学園大学、北海学園大学、北海道情報大学等教育機関と連携し、各大学の持つ強みを活かしたプロジェクトの実施および学生の受入を行った。

例) 酪農学園大学実践GIS研究室との連携

担い手の高齢化、不足により経営継続の難しい果樹園で関係人口等を巻き込んだ、これまでとは異なる持続可能な経営を模索している。

- ②浜益区に対し、ヒグマ注意報が発令され地域活動が制限された。今後のヒグマ対策、および自然と隣接した暮らしを守るために、早急に住民主体でヒグマについての勉強会を実施するための調整を行った。



【工夫した点、がんばったこと】

- ①外部人材の自己実現ではなく、地域のお困りごとに対し、強みを活かした関わりを促進しながら、双方に価値を創出する。
- ②行政による注意報発令を受けたタイミングを、住民による活動を促進する機会とする。

【成果、やってよかったこと】

- ①地域外の人材を地域のリソースとして協働することができ始めている
- ②ヒグマ出没を受け、地域内の人材、団体が一丸となり協力できることが明白になった。



【中間支援主体による支援】

見立て：
ヒグマ注意報の発令は地域の暮らしに大きく影響した。行政と住民の関係の揺らぎが起きた。

打ち手：
住民による勉強会を提案し、活動団体、支所、住民による活動を生み出した。

4

ローカルSDGs事業創出に向けて取り組んだこと

ローカルSDGs事業①『再生可能エネルギー推進（小水力発電）』／事業②『自然学校設立に向けた取組』

【段階】

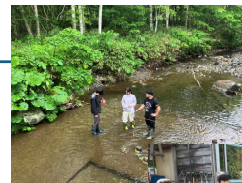
①試行・試験 ②計画・構想

【事業概要（地域の課題や事業のねらい）、進捗状況】

①浜益実田地区存在した大型の釣り堀「旧浜益フィッシングパーク」の利活用と再生可能エネルギー推進のため小水力発電の可能性調査として、流量計測を継続的に実施している。

【活用している自然資本・地域資源】

・暑寒別連峰から流れる水



【事業概要（地域の課題や事業のねらい）、進捗状況】

②浜益区の自然環境と暮らしに価値を見出し、これまで地域内で蓄積されてきた技術・知見を他地域へ広げることを目標に自然学校設立を目指している。中心となる関係者とのすり合わせは完了している。

【活用している自然資本・地域資源】

・きむら果樹園を中心とした自然環境、70～80代の住民の暮らしと歴史に関する知見

【事業により生じたor 生じそうな成果、環境・経済・社会の循環】

- ①地域内資源を活用した再生可能エネルギーによる新たな経済循環
- ②浜益区の自然、地域資源に価値が地域内外から価値が見いだされ、持続的に営まれる。

【中間支援主体による支援】

見立て：

住民や協議会を通して地域に関わる関係人口それぞれによる活動は生まれているが、浜益の暮らしそのものが評価されることは少ない。

打ち手：

1年以上をかけて、浜益の暮らし、自然環境そのものに焦点があたる方法を模索し、自然学校設立に向けた機運づくりを行ってきた。

5

前期の振り返り

	【気づき、発見】	【課題】
地域プラットフォーム構築	・ 外部人材との協働の中で、浜益区の持つ、特に札幌近郊の中では群を抜いている多様で豊かな自然環境を改めて実感することができた。 ・ ヒグマフォーラムの協力団体として地域団体の多くが洗い出され、人・団体の地域資源を知ることができた。	・ 教育機関とのマッチング、コーディネートを持続可能な仕組みとできるようコーディネート人材の育成が必要 ・ ヒグマに関する継続的な取り組みは、フォーラム開催後も検討する必要がある。
ローカルSDGs事業創出	・ 小水力発電を設置するための水量、勾配が必要で、現時点では設置するためには工夫が必要である。 ・ 浜益の自然資源や「陸の孤島」が育んだ暮らしはこれまであまり評価されてきていない。	・ 小水力発電設置の実現性を経済的観点から専門家、住民と共に検討していく必要がある。 ・ 自然学校での活動内容や担い手について具体的に検討すると共に、地域内の協力者を増やしていく。

【後期がんばりたいこと、工夫したいこと】

- ・ いっぺかだれやの会など、地域内外の人材によって地域ビジョンが検討される場が地域内で行われている。地域循環や自然資源の観点から持続可能な地域づくりのための意見出しを行いたい。
- ・ 小水力発電や自然学校など、具体的なSDGs事業創出に向けた動き出しを行っていききたい。

6

前期の振り返り（活動団体に対して発揮した中間支援機能）

【プロセス全体を俯瞰して、中間支援のポイントだったと思うこと（見立て・打ち手）】

- ・ヒグマ注意報発令による住民意識を察知し、機を逃さず住民による勉強会開催を提案することができた。また、専門家とのマッチングを行い地域外の人材の活用を促進できた。
- ・浜益区での取り組みを様々な場で事例発表する機会が増加した。地域外で注目される機会が増えていることを実感している。

【活動団体の変化】

- ・昨年度に比べ、事務局を担う人材が増加し、それぞれの知見や視点で地域に関わりを持つことができている。

【中間支援主体としての変化】

- ・浜益での取り組みを元にした他市町村での地域プログラムの実施、中間支援として地域運営組織や地域づくりに関するヒアリングを受ける機会、アドバイスを求められる機会が増加した。また、地域ビジョン検討の場など、地域内においても、役割を担いつつあることを実感している。

【後期どのような中間支援をできるといいか、していきたいか（見立て・打ち手）】

- ・ますます担い手が不足し、行政によるまちづくりではなく、住民による主体的な地域活動が待ったなしとなっている浜益での地域ビジョンづくりと今後の取り組みは、他地域でも参考になることを、他自治体・中間支援団体・大学など教育機関など様々なセクターとの意見交換と反応により実感している。外部からの中間支援ではなく地域内での役割を担いつつ、浜益の取り組みを外部へ発信できるよう取りまとめを行いたい。

参考情報

活動団体の目指す地域の姿

■地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

地域内外に多様な形で関わる人々と共に「陸の孤島」である地理的条件が育んできた浜益の文化と自然を生かし、エコツーリズムの促進やサステナブルな暮らしのモデル構築を目指す

■地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

- ①大学連携などにより、関係人口を受け入れ、地域の担い手として協働すると共に分散型で事務局機能を担う仕組みづくりを行う
- ②「ネットワーキング浜益」を再編し、取り組み状況と併せて情報発信を行うことで地域の機運を高める
- ③地域内で生まれようとする事業に対して専門家のマッチングや担い手確保等サポートする体制づくり

■ローカルSDGs事業として取り組む内容

- ①豊富な水資源を活用した、小水力発電事業の創出
- ②地域資源を活用したサステナブルツーリズムプログラムの開発
- ③木質バイオマス資源の活用やバイオ炭等、脱炭素事業の創出

■地域の現状と課題

急激な少子高齢化が進み、令和7年4月1日現在の人口は989人、高齢化率57%であらゆる分野の担い手不足が深刻さを増している。また、石狩市合併から20年を迎える2025年度末には地域自治区制度が廃止になる。行政サービスの維持や担い手の移行に関する議論が急務であり、これまで以上に地域住民が主体となった地域づくりが求められている。一方で、海水温上昇やエゾシカ個体数増加など環境要因により、地域の主要産業である漁業や農業、果樹産業にも大きな影響が表れている。そんな中、2024年度には地域住民が主体となった地域ビジョンを話し合う「いっぺかだれやの会」がスタートした。毎回地域住民、地域に関わる関係人口など30名以上が集まり、これまでの浜益とこれからの地域の姿について話し合いを進めている。「いっぺかだれや」は浜益弁で「集まって、話そう」の意味を持ち、浜益の地域づくりの中心は『対話』であることを参加者全員で確認することができた。また、具体的な地域課題も話題として提供され、課題を共有しながら、他世代、他セクターが混ざり合って話し合う素地が生まれつつある。

9

3 力年状態目標

■2026年度末の状態目標

- ①ふかんばの基本構想を軸にした事業が創出され、実践している
- ②開発された地域エコツーリズムを継続して実施していくための運営体制が整っている
- ③脱炭素化事業推進に向けて、浜益の自然資源・地域資源を活用した事業が開始されている

■2025年度末の状態目標

- ①勉強会を実施し、ふかんばの基本構想への理解が深まり、事業創出に向けた機運が高まっている
- ②地域エコツーリズムの開発を進め、事業化に向けた運用体制構築を進めている
- ③脱炭素化事業推進に向けて、浜益の自然資源・地域資源を活用した事業の試験的運用を進めている

■2024年度末の状態目標と振り返り

- ①機関紙「ネットワーキング浜益」の読み解き・再録冊子を配布することによって、ふかんばの基本構想(*1)が地域内に周知されている
(*1)「自然との共生方法の模索」「自然から学ぶ生き方の提案」「新たな地域資源の発見と流通構築」「創造的な仕事の開発」
→「ネットワーキング浜益」の再録冊子を地域イベントや集まりの場で配布し、予想以上の反響を得ることができた。また、「ネットワーキング浜益」と現在の浜益の姿を重ねて発信するnoteへ記事投稿を行い、地域外でも浜益での活動の軸を発信することができた。
- ②地域エコツーリズムの開発に向けた試験的なプログラム実施を進めている
→幌地区での古い写真を活用しながら、地域の方と共にまち歩きを行うワークショップを実施し、体験プログラム開発のための情報収集を行った。この手法は他地域からも注目されており、今年度浜益区以外での展開を検討している。
- ③脱炭素化事業推進に向けて、浜益の自然資源・地域資源の調査や勉強会を実施して理解が深まっている
→小水力発電に関する基礎調査、勉強会を進めた。

10

中間支援主体の支援・取組計画

■中間支援主体の1年間の支援目標

- ・地域内で地域循環共生圏の考え方（自然環境を中心とした地域づくり）がさらに醸成され、「いっぺかだれやの会」にて自然環境に関する話題が増えている。
- ・ローカルSDGsに関する事業創出に向けて、具体性のある検討を進めることができる。
- ・地域外から来る若者の姿がより浸透し、大学との連携プロジェクトが進んでいる。

■支援計画

	活動団体の取組における現状と課題 (見立て)	課題を解決するために必要と考える手段 (打ち手)
①	年々人口減少が進み、あらゆる分野において、慢性的に担い手が不足しており「地域住民」＋「関係人口」の協働を継続的なものにしていく必要がある	さっぽろ圏からの関係人口を送り出すと共に、大学との協働プロジェクトを推進し、主体的な地域外のリソースを活用できる状態を目指す。
②	「ネットワーキング浜益」再録冊子配布等によりサステナブルな暮らしの視点で地域を再認識する機会は増えたが、地域内に浸透したという状況には至っていない。	勉強会や「いっぺかだれやの会」で実際に浜益で活動する関係人口が活動報告や意見交流を行うことで、自然に地域内で自然環境に関する話題が増える状態を目指す。
③	勉強会の開催などによりローカルSDGs事業に関する機運は高まりつつある。	再生可能エネルギーに関する事業の具体化を目指すことで、地域内外に対しモデルとなり、地域資源の再認識に繋げる。